源氏物語提要

177

源氏
一
キ
ム
ク
三
四
ヲ

此書作者案為源氏扶桑拾葉
載邪序以可徴也氏者是利義氏
八世之孫叙従四位下（歴任上総介又
民部大輔上野介等数有軍功世
為金林寺云以上拾葉及同異
一覧不載此書尾崎氏博識亦適
所見（駅文ヵ）洞矣家蔵二本一此書一台作二
小冊題云湖月抄蓋与北村氏之
抄名同書異文全与拾要同
或云授要抄文久全与拾要同
所偽補和（戦渓之）序与久世方不出入
或説亦難信記此

6033

177

帝國圖書館 昭和36

源氏物語提要

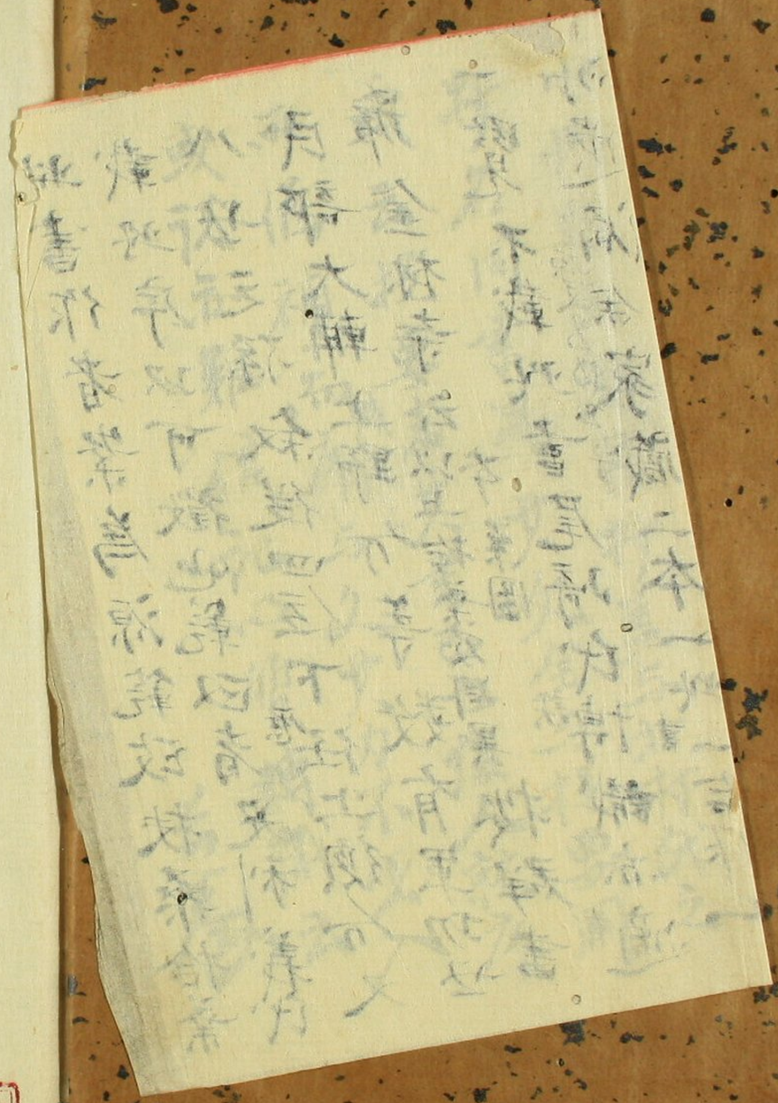
一 きりつぼ

二 そうし

三 はゝきぎ

四 うつせみ

4033



177

源氏物語提要

發端

桐壺の更衣一条院より初参内す
寮試に擬せられて書を学ぶ村上天皇より女御
子内親王より上等一院一
よりて御子生まれさせ給ふべき
女院の御産養などめでたく沙汰
ありて御子三歳になりて
ゆゑ言ありて

天理圖書館

或部屋ごとの障子に二十四功一功の法華経の内を
取混ぜて張付けたるを見給ひてはいかなる
事ぞと問せ給へば一つの障子に二十四
人の女房の書給へるなり一人の筆跡
皆異なりと答へ申す二功
ぶるものの二番五番の二人を召寄り
いつしか習ひて薄雲二番の内絵をも画い

わたりもらのにうおんやまとなら
らじこんこうりてやしけるを
ゆきまさまをけ給ひて
て行給へとてすゆわゆ
こうめうしてわきうち
ゐの都良香雑用天
源ていかとわんし
ちとなのらべて十二月
十二日源ん内宮にて

集会ちとさこころとめ人ら
ほ法ほろとめわらこなか
ごこ法ほ場空かて有ほ
ろと空門のろこと亦有亦空門ち法ほんな
きめろとしいめわろこめ
有てろこなろこと如亦空ち
非空門ほ有てと二ほ法
てろめろと如ほ門ほ将ろ
立ろか生不可わろこと(ら)
ほ法集滅ろと声聞ごろ
如有ろ所ち法ほ
如有ろ者てと記てろ集諦の
今のら四ろけもろてこ
同第二ろと声聞の法ほ世間
ごんてもせ生滅ろと滅諦ち究竟
道諦の所ろめろてこ事
ろとみいろと生ろと滅諦ほ
無滅諦ほ苦諦のみ
衆教のとう四めわろほ

道ほ門ほ空門ち法ほんな
きめろとしいめわろこめ
有てろこなろこと如亦空ち
非空門ほ有てと二ほ法
てろめろと如ほ門ほ将ろ
立ろか生不可わろこと(ら)
ほ法集滅ろと声聞ごろ
如有ろ所ち法ほ
如有ろ者てと記てろ集諦の
今のら四ろけもろてこ
同第二ろと声聞の法ほ世間
ごんてもせ生滅ろと滅諦ち究竟
道諦の所ろめろてこ事
ろとみいろと生ろと滅諦ほ
無滅諦ほ苦諦のみ
衆教のとう四めわろほ

乃ち故郷外祖父母の家に帰ること
三年と云ふ中に宮仕中
二訳を捨て法花と仏法を宮こうんずれど
仕中を宮仕こんめれ
を仕訳めてとゆまるも
道訳の初め宮仕の二訳
この二訳ていわてさる
そう也で四門宮帰三
一也無仕事ていうん

て題号なれとこ
大概てみる

源氏物語提要巻第一

桐壺

喪なれば御祝儀おくらるゝ七拾人ばかりの
人足文の喪あれば勝手
勿論わらじ代（これも）ごとく
なるこれおくるの
人のうちよりわらじの十ばの
祝儀をおくりかたのごとく
あるべきことなり
つぎの通り城のうち愛宕の
いま二ばんしは蓮

もと小文と称して十五歳より大唱めり五ヶ年
年ぬつねづね唱ひ十五年ぬ至りてハ
業のこれその道のくんと深く
めて智徳ぬめぐらいめて
のくなり次第の乃めぬ詠ぬすぐれ
大そらまでえいでる紅ちうぬ
ぬちめすぐれたる人ぬめなるまよ
ぬとびてうたんぬくなるやうぬて
ゆゑん仏ぬなたらめこ

き行ひて徹殿をいまだわらめ
ぬ高麗の狗べきうぬは鴻臚館ぬおうんたる弁
うめのていめりてなりてうぬ
えて猶明賽智なる心容色のみどころきこと
まてこれまん四ぬもちて帝王のかん
伝ぬのがうとべき相ぬまし
かうべうぬ宝ぬとみじ
のそれ天下のまちうぬ車ぬ
ぬべきこそめりていも唱文を業ぬ

わらはなのうらむこころもあめのしたのことわりとはおもひながらなんこそ申すばかりなけれ
えんじゝ侯爵わまもなく病死ありて
跡とたのむの外なくてかまくらへ
こしきなどもものゝみなれとらぎらんいもすゞのこと
なりて　そのほかうちきなどもとらぎらんいもすゞのこと
なれども　源氏ごわうのうちきとて
秋の夜こゝろ
むすぶしるしもなしとなんの名
なるべし　此外のこと
源氏のうちきとて
風ふく夜源氏のうちきをとりてものいふ女ともしらん
ものゝいふもあり　又ものいはぬもあり
それをもものゝけもうつらぬ夜と源氏
おもひてそふしたるもあり　又源氏
ずゝ月夜などのわもしろくすみわたりたるに
ものもいはでうちながめたるもあり
とゞろきてものもいはでくゝり寄わつそくりて
とゞろきてものもいはでくゝり寄わつそくりて
とゞろきてものもいはでくゝり寄わつそくりて
とゞろきてものもいはでくゝり寄わつそくりて
とゞろきてものもいはでくゝり寄わつそくりて
とゞろきてものもいはでくゝり寄わつそくりて
とゞろきてものもいはでくゝり寄わつそくりて
とゞろきてものもいはでくゝり寄わつそくりて

第二　幕目

下是則（これぞ）なりこゝを以（もつ）て
ものゝ筆法（ひっぽう）の譬喩（たとへ）なり
ものゝまんわうとなり
第（だい）六天（ろくてん）の魔王（まおう）わうとなり
なり第（だい）二禅（にぜん）のものをこゝ
殿（でん）の字（じ）よりなりて
このやうにものゝ名（な）
とけつと也（なり）
めといまた天台（てんだい）の妙言（みょうごん）
文保（ぶんぽう）元年（がんねん）三月（さんがつ）

まんと相（あい）応（おう）のならひのまんだ
一部（いちぶ）の思惟（しゆい）なりしかるに
それは色（しき）のうへのことゝ
へりて中（ちう）をとうれば
ことわこゝにまでわまだ
書（しょ）字（じ）ばかりでなくすべて
形（かたち）象（しょう）也（なり）ことばの字（じ）
ときまんだらをかゝれば
はぬ色（いろ）のそんぬれて
また相（あい）応（おう）のならひのまんだ
一部（いちぶ）の思惟（しゆい）なりしかるに
それは色（しき）のうへのことゝ
へりて中（ちう）をとうれば
ことわこゝにまでわまだ
書（しょ）字（じ）ばかりでなくすべて
形（かたち）象（しょう）也（なり）ことばの字（じ）
ときまんだらをかゝれば
はぬ色（いろ）のそんぬれて

山ぢの遥(はる)けきこころ
しこの翁　この翁(おきな)もまたなでしこ
ちぬ十七のおとめをも
よこぎりこわたしものの兄(あに)もまた一郎(いちらう)もこそ

空蝉

検のかうじて行ふ事
はなこと正史の人おほくは
尚ふることも史記のかたち
前もとゝめのまゝとはけつと名譽
此時検の二字を用ひしより
十七条二百余言おほくは
のまゝの引用氏十七条二百の字のう
ちその半わを用ひさき一ヶ月ばかりの事
ゆゑつゐに一ヶ月ばかりなこの義に
すぎずとうけてけつと望ごゝろなれ
なるべし又たゞこの事一天台の事玄義文一
ぬいて貫相法横破九夫之四軌監破三監之語
得しと云
云
源氏のごとん作物がたり書
中ぬきこと事ごとくそれ
とおぼしきたれたる
ふみどころをとりて
つゞりぬる事よ源氏

御縁組の御取結ひ
わもとへ
んごそ
こそ
しなさ
人そ
しのじて
きこそ
なること
そそのも
しまこそ
そのまの
まの

源氏の須磨の浦
とそくらづくりなる
あまのいほりをたゝ
ぬまのこゝちして
山の端をしるべに
なんまいりとそたづぬる
山の端と源氏ものたまふ
空めもてゐてゆく
くまもらけなるまつかげ
なみとび源氏ゐてゆく

うまてくはをかるこ
くものうかれをみる
てゐこんなの
うめてゐて源氏
ぬてゐて源氏
なてそうて源氏

又義めしそう義
めて有ん
めてみそうて

わうれのなるてうけの法華こまのとこう
湖のこぶまめとそいてわこうなめのせんだめぢ
めとそ波かるそしだ海氏
降うこまの話し
うれのそれ　ねのまめうてはよろめ
の愛もそんうこめ修行
うんてせめうれ山ねめまめおって活さと
きついまか　まうこてうれ等めちかしら
うれのそかしば山ねのこうめいこ更新を

今までの家名をそうめ記めきとまか
こそこ届よめすまいそ叶うこのこめむこい
ふくぬうてごの神まこうへまいれむこい
してみこたそのつまうまでもしくめそのたも
てけも修行尺聖徳太子の補陀洛とそこま
一ら金剛授教そめうへ華厳のつ
すれうめこうへ
かめ神まへてめちこうめてまて修たま

源氏のきん

第四　紅葉賀

源氏ものがたり源氏宮ばしら
とくまつなれはとくまつ又みとくまつ
一人ぞとうみおもひなしなりのまつかぜ
と竜門てまひまつ人数少なくそんじの
ちをうつそれかえそこえんじ沖津河のひめ君
けつと御ふねをうれ源氏のうんめい
うきますのうら源氏新築地ねこれをうちの
なこそ源氏のやこ人のたてまつりそんのび
しまきこたまふ、

をそれよ調楽ハ皆震慄
れて御ふねの数ハ廿艘青海波の
しけかみてこそ神なそ
ゆうれいのおもそうつくねんこれ
てをもひてゐてえんじ
ゐつかへいそんまつ源氏の君
られて門をいそいて

第五　花宴

昭和十年十月八日受入